



中規模歴史博物館での新しい活動の展開

— 竹中大工道具館を事例として —

川 畑 茂 男

要旨 竹中大工道具館が近年実施してきた新しい施策とその成果、及び今後の活動の方向性について、国内博物館の現状と共に分析し、以下の特性を指摘することができた。

- 1 国内博物館の入場者数は減少傾向にある中で、当館は来館者層拡大施策の積極的な推進により、入館者数は増加傾向になっている。
- 2 博物館の研究職員が減少傾向にある中で、当館はその比率と質を高め、他機関との提携を深化することで研究領域を拡大している。
- 3 今後、当館は入館者数の増大のみを求めるのではなく、専門分野の研究と幅広い活動を更に進めて社会的認知度を向上し、生涯学習社会に貢献できる専門博物館を目指すべきと考える。

キーワード 竹中大工道具館, 公益財団法人, 登録博物館, 歴史博物館, 生涯学習社会
原稿受理日 2012年9月5日

Abstract About the new policy which Takenaka Carpentry Tools Museum has implemented in recent years, its result, and the directivity of future activity, it was able to analyze with the present situation of the domestic museums, and was able to point out the following features.

1. Although the number of visitors of a domestic museum is decreasing, our museum performs the expansion activities of a visitor's layer positively, and the number of visitors has begun to increase.
2. Although the number of researcher of a museum is decreasing, our museum raised the ratio and quality, and the research area is expanded by enhancing the tie-up with other organizations.
3. Our museum further advances research of a special field of study, and a wide range of activities rather than asks only for increase of the number of visitors, and raises the degree of social cognition, and I will think from now on that the special museum which can contribute lifelong learning society should be aimed at.

Key words Takenaka Carpentry Tools Museum, carpenters' tools, a historical museum, lifelong learning society

1. はじめに

竹中大工道具館は、歴史的な大工道具の展示を中心とした(株)竹中工務店の企業博物館として、1984年に神戸市中央区で開館された。

その後、1989年には財団法人に、1990年には登録博物館となり、公益法人として活動して成果を上げ、2009年7月には累計来館者数20万人を達成した。また、2012年4月には財団法人から公益財団法人への移行が内閣府により認定された。

当館は現在職員11名、建築面積約1千㎡、入館者数約1万人/年で、いわゆる中規模の歴史博物館であるが、歴史的な大工道具の展示という分野の特殊性もある中で、入館者が伸び悩んでおり、十分に有効な施策が打てない状況であった。

しかし、最近の10年間は当館人材の刷新も含め、活動の形態を「待ち」から「攻め」に大きく変えてきた。ここでは、当館の活動の実績データと、政府統計である「社会教育調査（博物館調査）」のデータを連結して分析し、活動の成果と社会における当館の位置づけを明確にし、今後の活動の方向性を模索したい。



写真 1.1 竹中大工道具館

2. 国内の博物館の現状

国内の博物館の現状については、文部科学省により「社会教育調査」が3年ごとに実施されており、その一部として「博物館調査」の結果が公表されている。ここでは2010年4月に公表された「2008年度統計調査結果」を中心に活用して特徴を把握した。

博物館は、博物館法により表2.1の様に分類されている。この中で博物館相当施設は博物館法に従うものの、登録博物館より登録条件が緩い博物館である。当館が所属している登録博物館は907館で全体の16%と少ない。その中で歴史博物館は315館（5%）である。

博物館の種類（歴史博物館、美術博物館）と設置形態（登録博物館、博物館相当施設）を2*2分割表として捉えると、各セルでの設置比率に偏りが見られる（ χ^2 検定、 $\chi^2=14.98$ 危険率1%）。 実際、歴史博物館では登録博物館は期待設置数338.9に対し実績設置数315

と少なめに、また、美術博物館では登録博物館は期待設置数349.1に対し実績設置数373と多めに設置されている。

表 2.1 国内の博物館数の状況（注1）

設置形態 種類	博物館法による博物館			博物館法によらない博物館	合計
	登録博物館	博物館相当施設	小計	博物館類似施設	
歴史博物館	315	121	436	2,891	3,327
美術博物館	373	76	449	652	1,101
その他	219	144	363	984	1,347
合計	907	341	1,248	4,527	5,775
比率(%)	16%	6%	22%	78%	100%

次に、登録博物館と博物館相当施設の設置数からみた、各都道府県の位置状況は図2.1のとおりである。東京については都市の規模から判断してほぼ妥当なバランスと考えられるが、長野県と北海道は他とは異なったバランスにある。長野県は、登録博物館が70館と他都道府県より大きい、この中で旧民法第34条による財団法人、社団法人等が23館と他の都道府県と比較して多い。同様に北海道は、登録博物館45館中、市（区）町立の館が20館と多いことが特徴として挙げられる。また当館が立地する兵庫県は、ほぼ平均的なバランスにある。

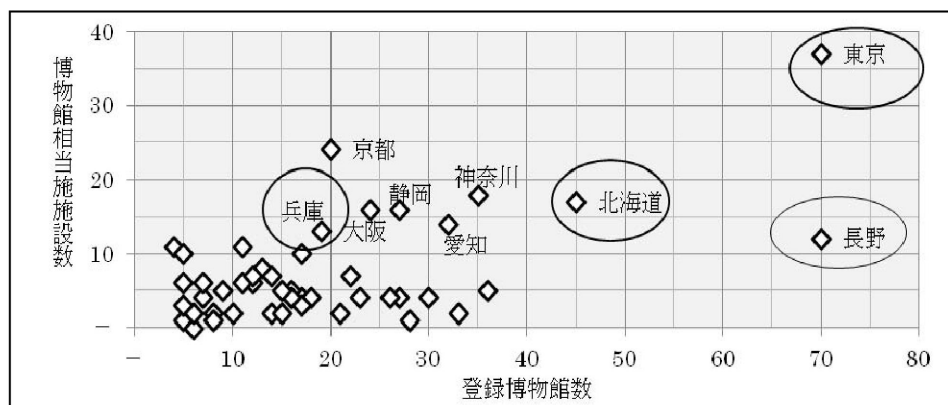


図 2.1 都道府県別博物館数（注1）

「登録博物館と博物館相当施設」1,248館について、博物館の種類（3カテゴリ）毎の館数と、そこに所属する専任の職員数の推移を図2.2に示す。当館が所属している歴史博物館と、美

術博物館（美術館）の数はほぼ同様に増加の傾向を保っている。しかし、動物園、植物園等が含まれている「その他」については、昨今の社会情勢もあり館数（園数）が伸び悩んでいる。これらの1,248館の専任の職員数は、昨今の社会の景気動向の影響も受け、2005年より減少傾向にある。

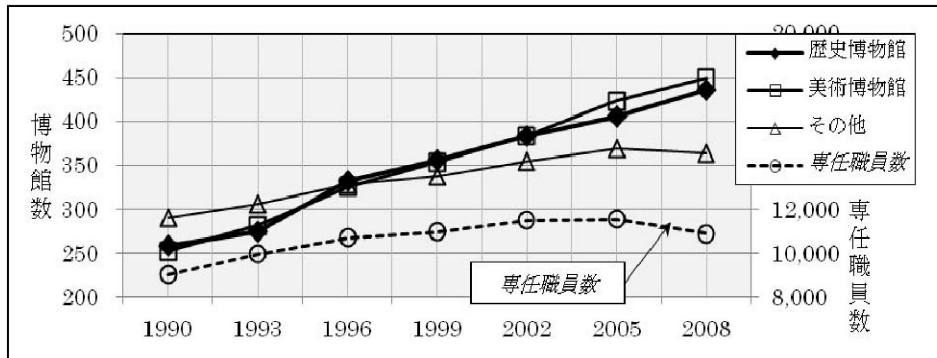


図2.2 博物館数の推移と専任職員数の推移 (注1)

博物館類似施設を含む5,775館に対する博物館1館当りの平均年間入館者数は、図2.3に示すとおり各種の博物館共に減少の傾向がみられる。その中で歴史博物館は、他の種類の博物館に比較して絶対数が少なく、2007年で年間20,000人強である。

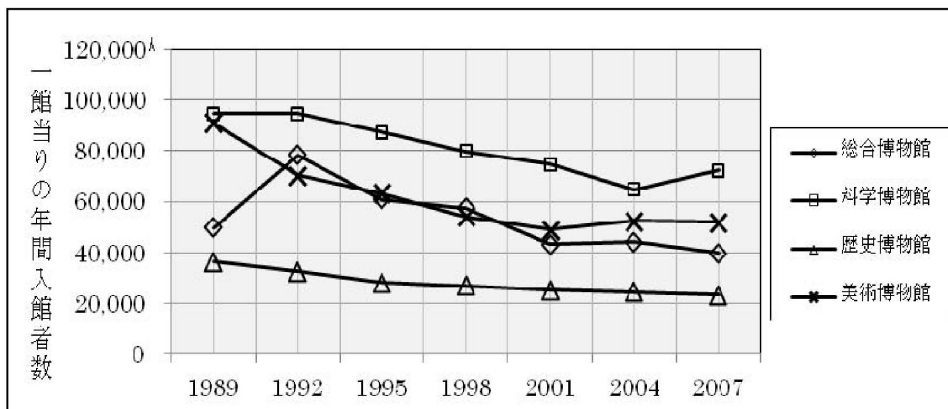


図2.3 博物館及び博物館類似施設における1館当りの年間入場者数の推移 (注1)

博物館をその建築面積別に分類した博物館数を図2.4に示す。財団法人、社団法人等のいわゆる旧民法34条による設立博物館の建築面積は、1,000㎡を中心によく分布しているが、都道府県及び市立等の博物館では、3,000㎡以上の大規模館が多い。

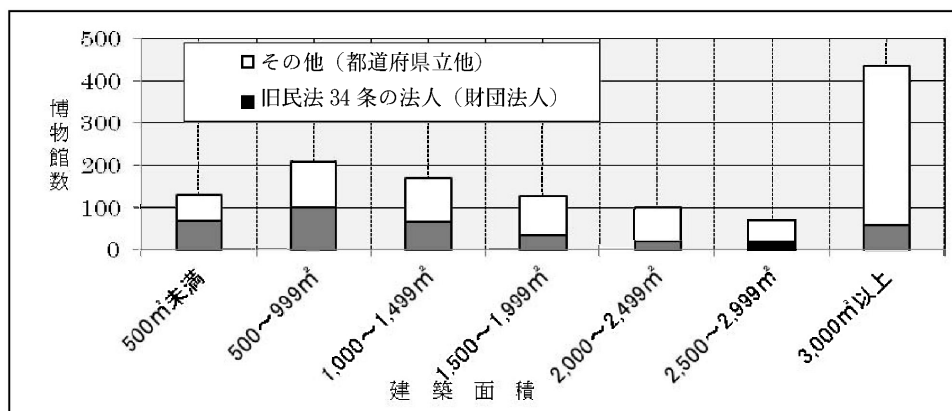


図 2.4 建物面積別博物館数（登録博物館、博物館相当施設）（注 1）

竹中大工道具館は、1980年より全国各地で大工道具の収集を始め、約 1 万点収集できた 1984年に、神戸市で開館した。

設立趣旨は、「・・・電動工具が普及する現在にあって、次第に消えていく古い時代の道具、優れた道具を民族遺産として収集、保存し、これらの研究、展示を通じて工匠の精神や道具鍛冶の心を後世に伝えていくため・・・」である。

企業博物館としての約 5 年間の活動実績をもとに、1989年 11 月、運営母体として財団法人の設立が認可され、1990年 1 月、博物館法に基づく歴史博物館として、兵庫県教育委員会の保管する原簿に登録（登録博物館 第 18 号）されて、企業から独立した公益法人としての活動が始まった。また、2008年 12 月の公益法人制度改革法の施行を受け、2012年 4 月には公益財団法人として認定を受けた。（内閣府 府益担第 1997 号）。

当公益財団法人の目的は、「定款第 3 条」で、「この法人は、大工道具及び資料を収集、保存し、それらを展示するとともに調査研究を行い、地域社会における教育、学術の振興及び建築文化の発展に寄与する。」としている。この目的を実現するための当館の活動の基本事業が、『定款第 4 条』に以下のとおり成文化されている。

- 1) 大工道具及び建築関連資料等の収集及び保管
- 2) 大工道具及び建築関連資料等の展示及び公開
- 3) 大工道具及び建築関連資料等に関する調査研究及び研究誌の発行
- 4) 教育、学術及び文化に関する普及及び支援活動
- 5) 竹中大工道具館の管理、運営
- 6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

現在の当館の規模は、理事8名、評議員9名、監事2名、館長を初めとした専任職員11名、建築面積約1千㎡、年間入館者数約1万人である。

今日までに収集した資料は、大工道具を中心とした約27,000余点に上り、その内約1,200点を常設展示している。



写真 3.1 館内展示の様子

大工道具のすばらしさを味わえるよう、①「伝える（道具の歴史、海外の道具）」、②「造る（大工の技、鍛冶の技）」、③「極める（輝きを放つ道具たち）」と題して、テーマごとに実物を展示すると共に、団体や希望者には研究員による展示の解説を行っている。またテーマ毎に映像を作成し、ビデオブースでの視聴サービスも行っている。現在までに当館が製作し、視聴可能な映像は、「大工道具と日本建築の歴史」、「木挽職」、「Japanese Carpentry Tools」など59タイトルで計494分（8時間強）となっている。

4. 新しい館活動の展開

当館の建築面積は、財団法人の博物館としてほぼ平均的規模であるが、年間入館者は1万人程度と、図2.3に示した歴史博物館の年間平均入館者数2万人強には遠く及ばない。

そのため、2003年からは、表4.1に示すようなサービスの向上のための施策の実施が、結果として入館者の増加に繋がると考え、一般社会や学識者、職人から親しまれ、特徴を持った専門博物館となるべく活動を推進してきた。

表 4.1 館活動の新しい施設

2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
			人的基盤の強化						
		館外企画展開催の定常化							
		大工道具体験環境の定常化							
		出張授業対応基盤強化							
	技と心セミナーの定常開催								
			ボランティア活動(道具手入れ、展示解説)						
		広報活動の強化							
	研究員による常設展の個別展示説明								
				本館増築					
			2006ホームページ改定、2007研究紀要改定 2009メールマガジン発刊、2010館NEWS改定						

(1) 人的基盤の充実・強化

1984年の本館開館後は、資料類の収集・保管・整理に重点を置いた活動を展開し、その後は、大工道具や建築史の調査研究を続けて成果を蓄積してきた。2003年頃より、その実績を企画展などで外部に発信していった。これらの活動を支える人的基盤の強化策として学芸員の交代も進めた。公募により、外国人も含めて、学芸員よりむしろ研究員という位置づけで、建築史系の研究者の採用を強化した。また、高度なレベルで大工道具を実際に扱える大工棟梁を、技能員として採用した。

これらの強化策を進めることで、現在では学芸系職員7名のうち、5名が博士号を取得している。大工道具専門の博物館として、学術的な面を担当する研究員と、手道具としての大工道具を実際に活用できる技能員がバランスし、幅広い活動が可能となった。図4.1からも読み取れるように、当館の人材の配置状況は歴史博物館の平均的配置と大きく異なっており、研究人材が充実した大工道具館という事ができる。

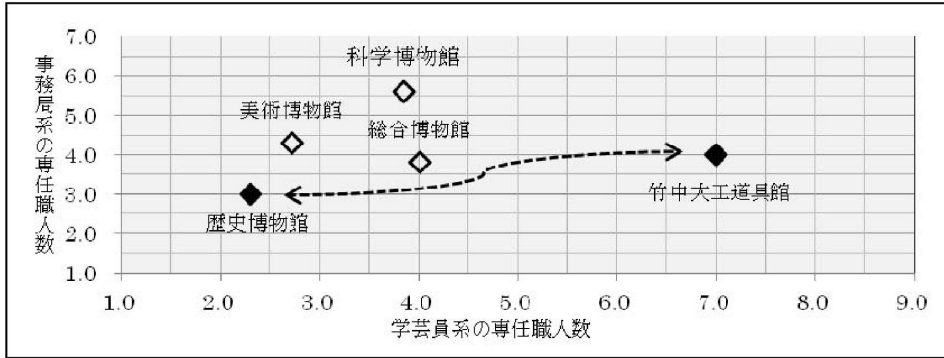
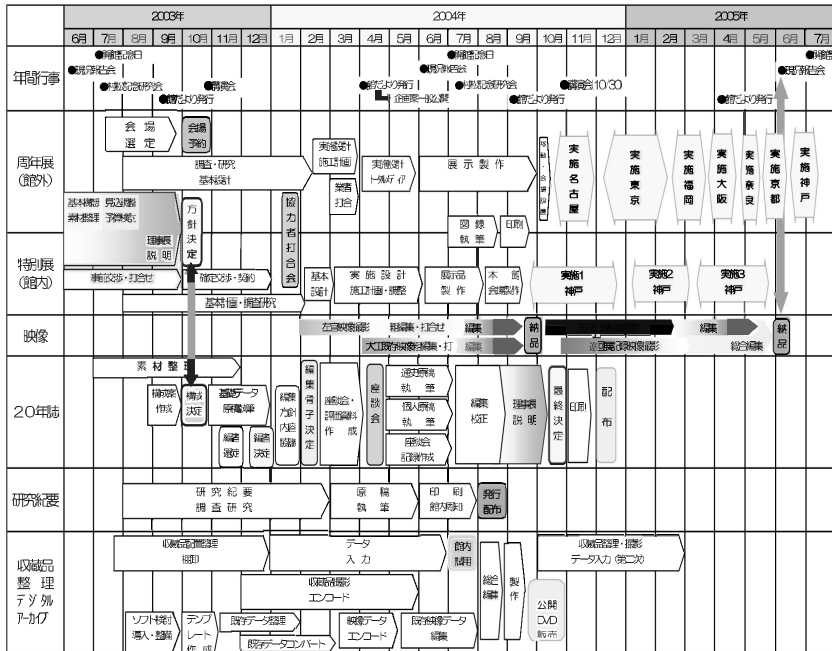


図 4.1 1館当りの平均専任職員数 (登録博物館、博物館相当施設) (注1)

(2) 館外大都市での企画展開催推進

当館では、開館以来必要な時に館外で企画展を開催していた。2004年から開館20周年記念事業として実施した7都市での巡回展をスタートとして、毎年新しいテーマを設定し、東京や名古屋等の大都市で企画展を開催する事を原則とした。館外での企画展の開催は、会場の確保・設営・運営、展示資料の運搬・展示などで多大な労力と多額の費用が発生するが、実際に実施してみて、地元の人にも多くの刺激を与えることが出来、当館を認知して頂くために大きな効果を実感している。かつて札幌で開催した時には、「こんな博物館

表 4.2 企画展開催の準備工程例



があるとは知らなかった。今度ぜひ神戸の本館に行きます。」との嬉しい言葉も頂いた。

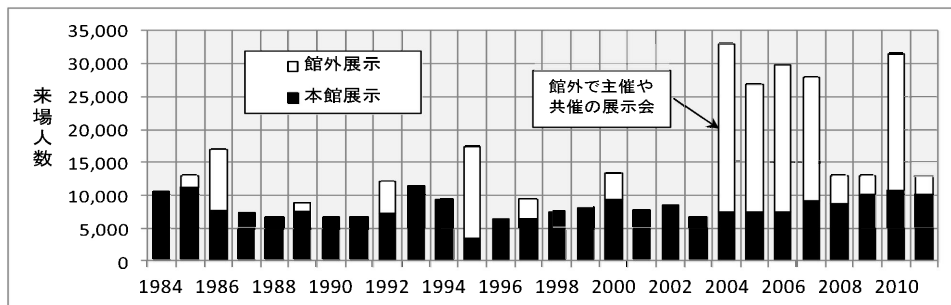


図 4.2 本館展示と館外展示への入場者数の推移



写真 4.1 企画展の開催状況(2012 東京)



写真 4.2 企画展の見学者状況(2006 奈良)

(3) 子供とのふれあいの場の提供

子供達に刃物である大工道具を使わせて、椅子やマガジンラックを製作したりする体験教室は、怪我等のリスクと、3～4名に1名の大人の指導者が付かないとなかなか成功しないという非効率さから、なかなか実施に踏み切れなかったが、2004年より本格的に実施した。特に毎年「夏休み子ども体験教室」はすぐ満杯になり、追加開催を行なっている。当館は常設の木工室を持っていないが、今後は



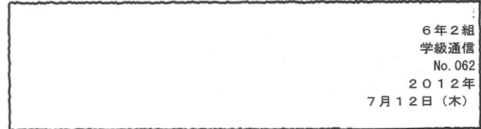
写真 4.3 いす製作体験教室の様子

木工室、機械工作室などを常備し、体験教室、木工教室などを充実して行きたい。

また、2004年より、当館職員が小中学校に出向き、大工道具に関する講義を行ったり、やりがんなの削り体験を行なう「出張授業」の積極的な展開を実施した。この出張授業は、1クラス単位で行なわれ、終了後、受講生徒によって表4.3のような「学級新聞」を作成するなど、多くの生徒に影響を与えている。



写真 4.4 出張授業の様子



大工さんってスゴイッ!!

昨日は竹中道具館の人が来て、大工道具の使い方を教えてくれました。大工道具ってたくさんあるんですね。のこぎり、かん、さしがね、かなづち、くさしその他見たことのないような道具までありました。大工さんはそれを上手に使い、家や神社、寺などの建物やいすや机などの家具を作るんですね。機械が発達する現代の世の中でも、手作りにこだわる理由が分かるような気がしました。だって、材料と道具と技だけでつくった建物が、1000年以上もこわれずに残っている建物(聖徳太子が建てた○○寺とか…)あるんですよ!機械には真似ができないんでしょうね。



みんなも実際にえん筆立てを作るなかで、道具の使い方の難しさを実感したのではないのでしょうか。ただ、木を切るだけなのに、思ったよりのこぎりうまく動かなかったり、真っ直ぐきを打っているつもりなのにいがんで打ってしまったり、こがねで真っ直ぐ引いているつもりなのに線がいがんでいたりしました。その

作業は大工の人はいとも軽々こなしてしまうのですから、おどろきましたね。この前のおやつ教室のときもそうでしたが、やっぱりアロワってすごいなぁ~と思いました。

今回は時間がなくて完成までできなかった人もいるかも!



写真 4.5 子供達が作った学級新聞

(4) 研究者、職人との人的交流の場の充実

開催する企画展では、「木の匠と鉄の匠」、「棟梁」、「茅葺屋根」など毎年新しいテーマを設定し、当館研究員が1年以上かけて、その分野の著名な学識者や大工、鍛冶、左官などの職人の協力を頂きながらチャンネルを築き、企画展を作り上げていく。この過程で、信頼関係や人的チャンネルが形成され、企画展終了時には関連技術も当館に蓄積される。毎年このような繰り返しのにより、幅広い人的チャンネルの構築や技術の蓄積が実現し、以後の館活動の大きな資産となっている。また、支援者に対し当館ノウハウ提供や協業体制によりイベント実現の協力を行なう協業体制も実現できた。このように日本の各地にお互いに協力し合える職人さん達との交流チャンネルが形成され、遠隔地で企画展などを開催するときには、貴重な支援を頂けるようになった。これらは、先に述べた当館の人的基盤の強化によって、著名な学識者や職人の専門能力、知識を理解できる基盤ができたのも大きな要因となっている。



写真 4.6 奈良見学説明会実施風景



写真 4.7 講演会の様子(2011年神戸)

（5）当館研究員の成果発表の場の強化

当館の研究員の研究成果は、年1回発行される研究紀要や、学会などに論文として発信される。2003年よりは新しく「技と心セミナー」を隔月で開催し、当館の研究員や外部の学識者や職人が講師となっており、一般参加者に研究成果の発表や中間報告を行っている。2011年末で計50回開催され、累計で2,360名の人が参加された。学識者と当



写真 4.8 研究員によるセミナーの様子

館研究者との人脈の形成としては、2003年より「研究交流会」を当館で開催し、外部学識者を交えて当館研究員との専門分野についての議論や、外部機関の研究プロジェクトへの参画などにより、学識者と情報交流を行なっている。

（6）ボランティアによる館活動の活発化

2008年社会教育調査によると、登録博物館・博物館相当施設1,248館の内、ボランティアの登録制度を実施しているのは462館（37%）である。当館は2007年にボランティア制度を導入し大工道具の研ぎ等の手入を中心に支援を頂いている。

所蔵されている当館の大工道具類約2万点は、常に使用出来る状態にして展示する



写真 4.9 ボランティアによる削り体験活動

ことを基本としているため、定期的に刃物の砥ぎなどの手入れが重要な仕事となってくる。中には名工品の研ぎそのものに魅力を感じているボランティア者もおり、両者共にメリットを享受でき、大きな成果をあげている。

現在のボランティア登録者は24名に達し、活動範囲も来館見学者に対する展示解説や、体験教室、出張授業の実施支援にまで広がり、機動力アップに大きく寄与して頂いている。

(7) 広報活動の積極化

1984年の開館時には、積極的な広報活動を行ってきたが、その後の活動にはややマンネリ化の傾向があった。2004年の開館20周年記念巡回展を7都市で行なうに当っては、当館の認知度を全国ベースで高めるために、広告会社を巻き込んで全国的な広報活動を展開し実績を上げた。その後はその蓄積ノウハウを積極的に活用し、ほぼ内作によって広報活動を展開し、図4.3に示すように急激的な広報類掲載件数の増大につながっている。

2006年には当館のホームページを全面改訂、2012年には英語に加え中国語、韓国語でのページも追加して、海外への発信も強化した。また2009年からは、当館のメールマガジンを年4回発刊し、ITを活用した広報活動も展開している。

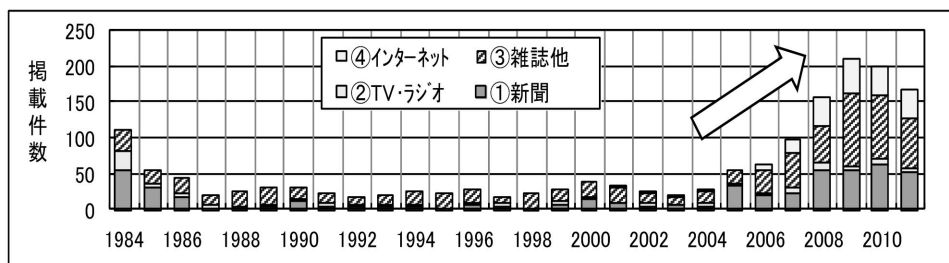


図4.3 当館記事等の掲載件数の推移

5. ま と め

以上新しい方向性の施策を行ってきた。各施策がどのような成果に寄与したかを個別に関連付けるのは困難であるが、全体的には以下の成果が得られた。

- 1) 国内の博物館入館者数が減少傾向にある中で、当館の入館者数は絶対人数は少ないものの、増加の傾向になった。(図4.4)

中規模歴史博物館での新しい活動の展開（川畑）

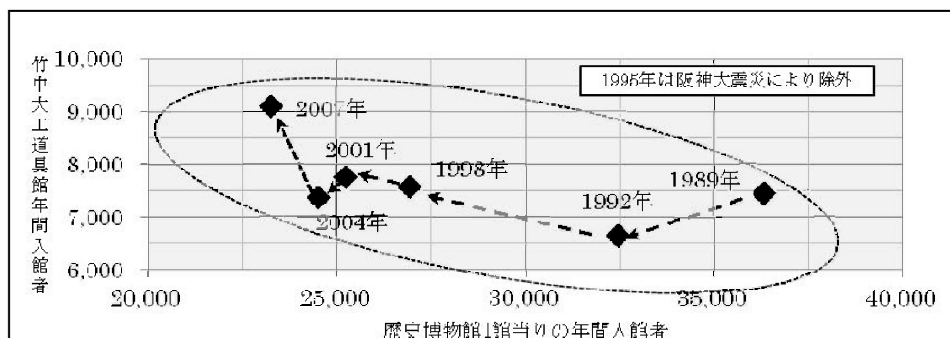


図 4.4 1館当りの年間入場者と本館と多館との比較 (注1)

- 2) 各都市に向いて実施する巡回展により、竹中大工道具館がより全国ベースで認知されるようになり、特に静岡県、島根県、香川県など遠方より団体客の来館が増えた。
- 3) 小中学校への出張授業実施などを通じ、神戸市など関連団体とのコミュニケーション・チャンネルがより太くなり、協業体制が充実した。
- 4) 研究レベルの充実により、大学や研究機関より論文査読などを依頼されるようになった。
- 5) 当館が、著名な学識者や大工職人、鍛冶職人、左官職人等の人達の情報交流の場として認識されるようになり、多くの情報が集まるようになった。
- 6) 展示を見るだけでなく、鉋削り等を実体験出来た事に対する人気は特に女性来館者に高く、リピーターも増大している。

これらの活動が評価され、2008年には社団法人企業メセナ協議会による「メセナワード2008 メセナ大賞部門 伝統技継承賞」を受賞することができた。また、2012年1月に企業博物館のランキングが朝日新聞上に掲載された際、約200の企業博物館の内、竹中大工道具館は14位に位置づけられた。

1984年の開館以来、大工道具の歴史博物館として土台をしっかりと形成し続けてきたことが、近年の新しい展開に繋がり、移行されつつある生涯学習社会に対応する準備が整ったと考える。また一方では、最近、全国各地で、建築関係や木工関係の団体などが各地の博物館と協力して活動を行うようになり、着実にそのネットワークが広がってきている。当館もこの活動の一翼を担い、長期間日本の伝統建築を支えてきた手道具としての大工道具と、ものづくりの大切さを発信し続けることが重要と考える。

注

1. 平成20年度社会教育調査（博物館調査，文部科学省，2010年4月公表）
（いくつかの資料は，博物館調査データを基に筆者が加工作成した。）
2. 『新しい時代の博物館制度の在り方について』文部科学省，2007
3. 『竹中大工道具館10年史 1984-1994』竹中大工道具館，1995
4. 『竹中大工道具館20年の歩み 1984-2004』竹中大工道具館，2004